

2012年01月07日  
年のはじめに

2012年が始まりました。  
今年こそ、今年こそは、よい年になりますように。  
私たちがみな願をかける、期待と希望をはらんだ新年つかの間の時です。

劇団も新年の顔合わせをしました。

このような世の中だからこそ、人数は少ないですが、身近な仲間とともに今年も多くのみなさんに舞台で出会えるよう、歩んでゆきたいと思います。

いつもご支援をいただきありがとうございます。  
今年もどうぞよろしく願いいたします。



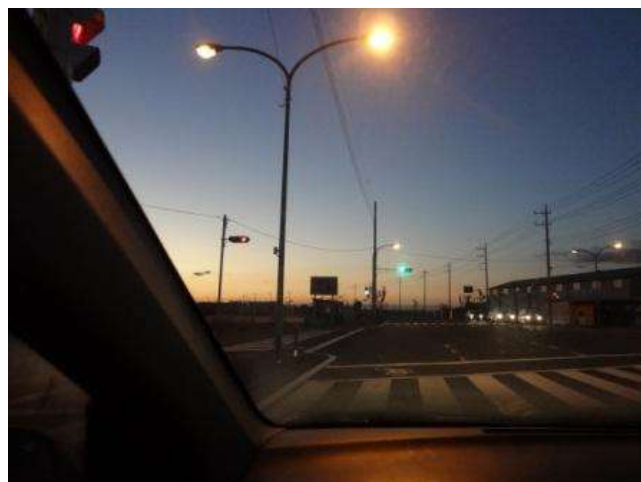
(劇団のメンバー。昨年末の納会で。中村さんを囲んで)

2012年02月16日  
「ゆめみこぞう」 おひさま倉賀野保育園公演

劇団の仕事はいつも朝が早い

朝焼けの東空、まだ月が輝いている西の空、2月11日の早朝。  
新作舞台の「ゆめみこぞう」を、初めて上演しました。

高崎市にあるおひさま倉賀野保育園が、‘保育園を支える会 文化企画’として、劇団をよんでくれました。



新しい劇は、舞台を仕込む順序がまだ決まっていないので、最短時間で無駄なく運ぶ手順の流れをあれこれ模索しながら、ちょうどいい広さの園舎ホールに舞台を仕込んでいきます。



明かり合わせをしているところ



合唱や発声をして体をほぐす出演者たち



園長先生や職員、支える会実行委員のみなさんが受付で出迎える、とても温かな雰囲気の間です。午前と午後の二回公演に、それぞれ大勢のみなさんが会場に集まっています。午前中が低年齢の子ども、午後が年中・年長さんたち、それぞれ保護者のみなさんと一緒に観劇してくれました。



ゆめみこぞうは群馬県北西部の六合(くに)村(今は中之条町)に伝わる民話を題材にしています。

うす暗い明かりの中から、お化けのようにぼうつと登場する河童や山の神を見て、泣きだす子が何人もいました。こどもは目に見えるものすべてをほんとうのものとして感じ取り、とても真剣に受け止めます。

後半、主人公の吾助がやじろべえのように‘娘’たちに引っ張られる引き合いの展開になると、今まで泣いていた子もようやく惹きこまれていくようでした。

全体的には大人もこどもも幅広い年齢層でそれぞれにおかしさを感じることもできる、痛快な昔話になっていると思います。

おもしろかったという声も多くいただきましたが、庄屋屋敷の使用人たちがお正月の小遣いをもらうために、必死になって旦那に取り入る様子や、身分階級の一番下にいる風呂焚き小僧の吾助が、使用人の大人たちから冷たくされて、小さな社会から追い出される境遇などをことばで伝えるには、小さな子どもにはまだ難しいのではないかという感想もいただきました。

おひさま倉賀野保育園は、ホールや各部屋のづくりも機能的で、園庭の先には小さな古墳の山があり、のびのびと子どもが成長できる保育園です。

祝日の土曜日という貴重な時間に、ゆめみこぞう公演の機会をいただき、また早朝から夕方まで、保育園のおいしい昼食などのお心づくしを頂き、たいへんお世話になりました。

ありがとうございました。

‘いま’を込めた昔話の寓話を、保育園や小学校、中学校の子どもたちに伝えていくにはどうしたらよりいいだろうかと、課題を抱えて「ゆめみこぞう」公演が始まりました。

2012年07月19日

## 7月16日 さよなら原発10万人集会

7月16日の代々木公園のさようなら原発10万人集会に前橋の民主団体がチャーターしたバスで参加しました。

主催は「さようなら原発一千万人署名市民の会」

夕方のニュースでも各放送局が伝えたほど、大規模の集会でした。

NHK 本社ビルの真ん前で行われた集会を、NHK はどのように報道したのでしょうか。確認しませんでした。

午前中から気温はぐんぐん上がり、太陽がじりじり照りつける広場がみるみる人で埋めつくされ、著名な呼びか

け人の人々がそれぞれスピーチをする中、午後には早くもデモ行進が始まりました。

私たちが集まっていた場所はステージの後ろ側だったので、ざんねんなことにスピーカーの音がほとんど聞こえませんでした。

大江健三郎さん、澤地久枝さんたち呼びかけ人のことばをじっくり聞くことはできませんでしたが、かつてない盛り上がりの中、市民が怒りの声を上げているのだという会場の熱気は、十分身に感じました。

労組、市民団体、若者や子育て世代のみなさんが集結した大群衆を一望することができないほどの人出でした。この人々の声を無視しないでくれと、思います。



代々木公園から新宿都庁コースのデモ行進に私たち劇団も行列に参加しました。



列が動き出すまでに、何時間も待ち続けました。

大群衆が一人一人狭い出入り口を通り抜けるので、なにせよ時間がかり、待ち続けました。

毎週金曜日に首相官邸前を囲むデモ行動も、同じだと聞きました。

荒ぶることなく、行列をつくり立ち続ける人々がいます。

ひとたび大事故が起これば、一つの地域、国だけでなく世界中に災禍をもたらす原発を、東日本大震災を経験したわたしたちが、心底から相容れないものだようやく気がついたのに、まだ‘神話’を信じている為政者がいます。

炎天下でも、時折心地よい風が吹き抜けるので、気持ちのよい日でした。

あの集会の中で、熱中症で何人も人が倒れたというニュースはなかったと思います。

都会の若者が、そして日本中から、信念をもつ人々が集まっていました。

◇ほっと一息◇

未来スタジオの屋根のひさし下にはまっていた羽目板のボードが、6月の台風の暴風雨で1枚はげてしまいました。

ボードは前から浮き上がっていたので、その隙間にスズメが入りこんで巣を作り、住処にしていました。

それがなくなってしまったので、大丈夫かなと思いましたが、かえって出入り口がすっきりしたようで、パタパタ威勢よく飛び出していくようになりました。

シジュウカラとスズメが同居しているようです。ことりマンションが出来てしまいました。



あまり害がなさそうなので、屋根の修理はしないで、住まわせてあげています。



劇団の夏季は、地域の小学校、保育園公演へ出かけています。

今秋以降の公演予定が決まり次第、お知らせしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

**2012年09月24日**

**秋の劇場「なめとこ山の熊」にご来場頂きありがとうございました**

9月22日23日の二日間、劇団群馬中芸の九月公演「なめとこ山の熊」を上演いたしました。

初日は気温も上がって蒸し暑い中、二日目は一転雨模様のなか行われましたが、今回も大勢の人々があかぎ未来スタジオにおいでくださいました。



「なめとこ山の熊」は2005年秋の初演以来、度々スタジオ公演の演目として取り上げてきました。

すでに何度もご覧いただいている方も多いのですが、毎回劇場でお会いすることが出来るのはほんとうにありがたいことだと、身に沁み入って感じております。

再びの劇場公演に向けて、宮沢賢治の原文をもう一度読み直すことから稽古をはじめ、演出のせらだひとしこと中村欽一さんと、また一から台本を掘り起こして稽古をいたしました。

慣れてしまっていた部分を指摘され、俳優・スタッフも試行錯誤の連続でした。二日間の本番中、それぞれの中に反省や不消化な部分はあったと思います。

幸いにも群馬中芸の大きな財産であるみなさんのご支援やあたたかい拍手に励まされながら、公演を終えることができました。

生身の人間のすることに「完成」はありませんが、舞台の中に人間の真実が少しでもかいま見えるような瞬間があればいいなと思っております。

いつも共に劇場公演をお手伝いして下さる桶川市のいなほ保育園のお母さんたち、お父さんたちには、ロビーや食堂でおいしい食事や手作りおやつの販売や、劇団員の胃袋のほうまですっかりお世話になってしまいます。

公演の打ち上げで、劇についての感想をお聞きすると、どの方も個性的で感性豊かな視点から、芝居の内容や宮沢賢治が描く人間像のことや(「荒物屋の主人は、現在を生きている自分の中にも存在するのではないだろうか」)、こどもたちの様子など、日常を生きていくことでどんなことを大切にしているか、また大切にしたいかを、ゆっくりと丁寧に語って下さいました。それは、あたたかな人間への信頼が根幹にある社会を願うことにつながっているようでした。とても真摯で誠実な人々が保育園を支えていることを実感します。

今回も、遠方からお越しの方、子どもの頃に中芸の劇を観て以来社会人になって初めて劇場へ出掛けて来てくださった方、いつもご支援ご協力くださるみなさん、駐車場や受付を手伝ってくださった方、このたびもまことにありがとうございました。心より御礼もうしあげます。

群馬中芸一同



2012年12月30日

## 東日本大震災支援公演・宮城県七ヶ浜町へ

2012年も無事演劇活動を終えることが出来ました。

今年も大勢の方々に舞台をご覧いただき、また、劇場へ足を運んでいただいたり、ご支援ご協力いただき、たいへんお世話になりました。どうもありがとうございました。

秋から冬にかけての巡回公演を終えた12月22日には、‘子どものための舞台芸術創造団体の会’から派遣依頼の連絡を受けていた宮城県の七ヶ浜町へ、東日本大震災のボランティア支援公演として出掛けました。被災した地域を訪れていない劇団員も多く、被害を受けた人たちのために何か自分たちに出来ることはないかと気がかりにしていたので、この機会を待っていたような心持ちでした。

色々な方法で、芸術団体も支援活動をしています。小集団の私たちにはなかなか実際の支援に結びつくことが出来ていませんでしたが、関西圏からの災害支援活動は活発に行われていて、今回私たちが参加したイベントを主催していたのは、兵庫県姫路市の学習塾でした。

被災した小・中学校の子どもや仮設住宅で暮らすお年寄りに、明るくて楽しい音楽ライブで元気に楽しんでもらおうと企画したクリスマスイベントのようでしたが、進行を進めるはずの学習塾の主催者は開演時間過ぎまで姿を現しませんでしたし、事前配布したというクリスマスイベントチラシを当日になって目にしましたが、内容が分かりにくく、演劇はおざなり程度に紹介されているだけでした。

七ヶ浜町の高台にある公民館内の会場には、敷地内の仮設住宅で暮らしているお年寄りや、団員の友人知人が十数人集まってくれました。

残念ながら子どもはひとりも来ていませんでしたが、予定時間がおしていたので、「ゆめみこぞう」の上演を開始しました。

ところが、椅子一列に座るお客さんたちの、たのしそうな笑い声や劇中のことばに反応するかけ声が最後まで続き、昔話のことばに聞き入って劇そのものを楽しんでいるという、劇団がこれまで感じたことのないような集中した雰囲気の手応えを感じる体験をしました。

そのことに私たちは救われるような思いでした。

劇が終わった後、仮設住宅で暮らす年配の女性が、ご自分の住まいからりんごや手づくりの可愛い人形を持って、再びやって来てくれました。

もっとたくさんの人に見せたかった、公民館は高台にあって階段を登らなければならないから、ここまで来られる人は少ない、下の集会所でやればよかったという感想を、語りべ役の劇団員に話してくれたそうです。

みなさんに喜んでもらえたことが何よりうれしいことでした。

私たち劇団も含めて、外部から思い描く支援の方法と、被害を受けた地域の人々の実際直面している問題には、くい違いがあることを思い知らされる機会でした。

本当に求められているところへ、人々のところへ、必要とされているものが届くことを願うばかりです。

自分の身は自分で守るしかないんですという、おばあさんのことばが重く残ります。

依頼を受ける形では、間接的になってしまうばかりで、現地の要望が見えにくいという反省点も残りましてし、つてのない場所で一劇団が自力で集客することの困難さはよく承知しています。

またこれからもできるかぎり支援活動を続けていきたいと思います。



伊丹さんというおばあちゃんからいただいた人形です。